

章學誠の歴史觀

稻 葉 一 郎

はじめに

章學誠の年譜、胡適・姚名達『章實齋先生年譜』を一瞥すると、彼の『文史通義』に結實する主要な諸論文は『史籍考』の編纂の時期に集中的に執筆されていることがわかる⁽¹⁾。『史籍考』は乾隆五三（一七八八）年、河南巡撫（のち湖廣總督）畢沅の後援の下、朱彝尊『經義考』に對抗して執筆された經緯からして歴史敘述に關する包括的な著述であつたことがうかがわれる⁽²⁾。この書は結局、畢沅の死などによつて完成せず、原稿も佚亡したが、その編修の過程で彼ならではの諸論文が書かれたとすれば、むしろそのことを善しとすべきであろう。また注目すべきはこれと並行して畢沅『續資治通鑑』の編修にも従事していることである。この編修には錢大昕はじめ多數の學者が關與したが、章學誠も『史籍考』のスポンサーを依頼した關係からこれにもかかわることになった。そしてこのことが彼の歴史學に關する認識を一層深める結果ともなった。章學誠はかねて親友邵晉涵と『宋史』の改修を計畫していたが⁽³⁾、結局、實現せず、結果としてはこの『續資治通鑑』の編修がその代償行爲となつたのである。

清代の歴史學を特色づけるものは、端的にいつて歴史考證學の發達であり、多數の地方志の編纂である。前者に關しては乾隆年間後半、いわゆる考證學の發達の中より歴史考證學が突出し、以後、十九・二十世紀へと繼續的に發展

する形勢が生まれる⁽⁴⁾。後者の要因としては康熙帝の命により『大清一統志』の資料的基礎として地方志を編纂させたことが契機となつて、定期的に地方志を編纂する道がひらかれたことが挙げられる⁽⁵⁾。また雍正六年十一月には雍正帝の諭旨が下され、

志書と史傳とは相い表裏す。其の一代の名宦人物を登載するに、之を山川風土に較ぶるは尤も緊要たり。必ず詳細に確查し、慎重に採録せよ。至公至當、偉績懿行をして逾よ久しく逾よ光かしむるは乃ち不朽の盛事に稱う。

（中略）本省の通志を將て重ねて修輯を加え、考據の詳明、摭採の精當を期するに務めよ。『世宗實錄』卷七五）とて、皇帝が地方志に對する認識と指針、それに基づく期待を表明したことは、後の地方志編修に大きな影響を與えることとなつた。とくに地方志と國史の傳記とのかかわりを皇帝自らが示唆したことは地方志の高い位置づけを公認したことを意味する。

清代における地方志編修の隆盛は、こうした皇帝の言動もさることながら、いわゆる思想統制の風潮の下では私的な修史に慎重にならざるを得ず、學者・知識人たちの歴史に對する關心を地方志編修に向けた結果でもある⁽⁶⁾。とくに地方志編修に關しては、中國の知識人の深層に共通に伏在する史官意識、あるいは眞實の姿と規範となるべきものを書き残そうとする意識に負うところが大きいとすべきであろう。清代の地方志の多くが文人學者の手になり、中には紀傳形式をとるもののあることがそのことを如實に物語っている。あたかも歴史考證學の發達を承けて多數の文人學者が地方志の編修に參加したのである。

地方志の編修がこのような知識人たちによつて擔われるかぎり、地方志は單に地方の歴史事象の敘述に止まるものではなく、やがては地方志を媒介にした、より高次の歴史敘述を志向し、さらなる高次の思索、理論化を追求することになる。小考では地方志の編修を通して歴史學の理論化を追求した章學誠の歴史認識の姿を探ることにしたい。

なおテキストには主として倉修良（編）『文史通義新編』（上海古籍出版社、一九九三年刊、以下、『文史通義』と

略稱、ただし引用は舊字）本を使用する。

一 史法と史意

章學誠は清朝の乾隆時代を生き、その文運と風氣の中で活躍した歴史家である。そして彼の著述が形成される四十年代後半は『四庫全書』の編纂に後押しされて學界は良きにつけ悪きにつけ活況を呈していた。隠れた名著が收録されることにより廣汎な讀者をもつことになる一方、清朝にとって都合の悪い文獻は禁燬處分に付され抹殺された。こうした狀況の中で盛んになったのは考證學であり、歴史學の各分野でさまざまな業績が刊行された。その多くは當時の學問の水準の高さを示す力作であり、清朝考證學の成果として光彩を放つものであったが、しかし章學誠にとつては必ずしもそのすべてが歡迎すべきものではなかった。そのことについて彼は次のようにいう。

乙部の學、近日の見るところ、更に進歩あるを覺えるに似たり。（中略）（然れども）世士、博稽を以て史を言え
ば、則ち史考なり。文筆を以て史を言え、則ち史選なり。故實を以て史を言え、則ち史纂なり。議論を以て
史を言え、則ち史評なり。體裁を以て史を言え、則ち史例なり。唐宋より今に至るまで、積學の士も史纂・
史考・史例に過ぎず。能文の士も史選・史評に過ぎず。古人の爲むる所の史學は、則ち未だこれを聞かず。（『上
朱大司馬論文』『文史通義』外篇三）

と。この言葉は當時の歴史研究に對する章學誠の包括的な批判と見ることが出来る。要するに、今日史學は進歩した
ように見えるが、それは歴史學の中のそれぞれの細分化した部門の局促せる營爲に過ぎず、史纂、史考、史例、史
選、史評はいずれも史學の名に値しないものであり、古のいわゆる史學は今日、存在しないものである。ここに
は彼の目指す歴史學の姿が批判を通してむしろ具體的に示されている。史纂、史考、史例、史選、史評に細分化され

て發達した歴史學の各分科の包括的成果の上に立つ總合こそが彼の目標であつたことがわかる。

そしてこのような歴史學の現状に對する批判は、究極的には彼の學問上の先覺者であつた唐の劉知幾への批判にもつながっていく。

吾の史學におけるや蓋し天授あり。自ら發凡起例、多く後世の開山たるを信ず。而るに人の乃ち吾を劉知幾に擬するは、劉の史法を言い、吾の史意を言うを知らざるなり。劉は館局の纂修を議し、吾は一家の著述を議す。截然、塗を兩つにし相入らざるなり。〔家書二〕『文史通義』外篇三

と。ここで章學誠は自己の史學と劉知幾の史學の相異をはっきりと明言している。劉知幾の議論はあくまでも館局、すなわち史館・修史局における纂修の史學であり、主として史法をいうのに對して、章學誠の史學は一家（言）の著述であり史意を言うのである、という。館局纂修の史學は、先には史纂として退けられたが、ここでも史法をいうものとして貶しめられている⁽⁷⁾。劉知幾が何れかといえは方法論を中心に歴史學を説くのに對して、章學誠は方法論よりもむしろ歴史敘述の目的を説く。章學誠は劉知幾から史料批判の方法をはじめとして紀傳體の歴史敘述の方法論など、多くを學びながらも、歴史敘述の究極の目的に關しては満足すべきものを得ることができなかった。その歴史敘述の目的、歴史學の目標こそは史意であるという。

ところで劉知幾の生きた唐代前期は訓詁學の全盛期であり、經學で説かれる哲學もせいぜい天人相關説であり『易』の變化の哲學であつたろう。劉知幾が宋學につながる經書批判を展開していた⁽⁸⁾にしても、彼の歴史學の中に垣間見る哲學は素朴なものであつたといつてよい。中唐以後、宋代に盛んになる批判哲學、性理學、さらには明代の陽明學の展開を批判的に受け止めた章學誠にしてみれば、彼の方法論中心の歴史學に満足できなかったのも當然であつたろう。劉知幾の歴史學に深い思想性を看取できなかったとしてもやむを得ない。

そのような觀點から、章學誠のいう、史法に對する、史意を探るとすればどのようなになるか。史意については章學

誠自身の具體的な説明がないところから、これまでいろいろな見解が提出されているが⁽⁹⁾、この點について據り所となるのは、

孔子の春秋を作るや、蓋し曰く、その事は則ち齊桓・晉文、その文は則ち史。その義は則ち孔子自ら爾に取るありと謂う。(中略) 則ち史家の著述の道、豈に義意の歸する所を求めざるべけんや。(司馬) 遷・(班) 固より而後、史家に既に別識心裁なく、求むる所のものは徒だその事その文にあるのみ。惟だ鄭樵のみ稍や義を求むることを志すあり。「申鄭」『文史通義』内篇四)

史の貴ぶ所の者は義なり。而して具ふる所の者は事なり。憑る所の者は文なり。孟子曰く、其の事は則ち齊桓・晉文、其の文は則ち史、義は則ち夫子自ら竊かに之を取ると謂う。「史德」『文史通義』内篇五)

なる記述であろう。ここに見える義意こそが史意に相當するものであり、具體的には孔子の『春秋』筆削の義に相當するものであることがわかる⁽¹⁰⁾。そしてこの義意は司馬遷・班固以後では、僅かに鄭樵のみが追求しているに過ぎないともいう。類似の典據を挙げれば、

章子曰く、史の大原は春秋に本づき、春秋の義は筆削に昭らかなり。筆削の義は僅かに事、始末を具え、文、規矩を成すのみにあらず。夫子の義は則ち竊かに之を取るの旨を以て之を觀るに、固り將に天人を綱紀し、大道を推明せんとし、古今の變を通じて一家の言を成す所以の者なり。「答客問上」『文史通義』内篇四)

なども、同様に義意の概念を充實させるのに役立つであろう。これによれば、筆削の義のもつ意味内容は「天人を綱紀し、大道を推明し、古今の變を通じて一家の言を成す」ことともなる。また、

史學は世を経むる所以にして、固より空言もて著述するものにあらず。且つ六經の如きは共に孔子に出で、先儒、以て其の功、春秋より大なるはなしと爲すは、正に當時の人事に切合せるを以てなり。後の著述を言う者、今を舍きて古に求め、人事を舍きて性天を言うは、則ち吾、之を知るを得ず。學者、斯の義を知らざれば、史學

を言うに足らず。(整輯排比、之を史纂と謂い、參互搜討、之を史考と謂う。皆な史學にあらざ)。〔浙東學術〕

『文史通義』内篇二

とあるのによれば、歷史學の効用を経世、すなわち世を経め、世に役立つこととし、空言で満たされた著述とは一線を畫すものだとする。また六經のなかでも『春秋』に對して孔子が最も力を入れたのは當時の人事に切合していたからであるとし、當代のこと、しかも人事を重んずべきことを説く。このことは章學誠が同時代の事柄を著述に載せる、あるいは同時代の事象を通して經世の主張を展開しようとしていたことを窺わせる。

史意が『春秋』筆削の義に相當するものであるならば、章學誠が歴史敘述に盛ろうとしたのも同じものであったことになる。この孔子が『春秋』筆削に寓したものについて彼は次のようにいう。

天人性命の學は空言を以て講ずべからず。故に司馬遷は董氏の天人性命の説に本づいて經世の書を爲る。(中略) 夫子の曰く、我、之を空言に託せんと欲するも、これを行事に見わすの深切著明なるに如かず、と。これ『春秋』の、世を経むる所以なり。(『浙東學術』前掲)

と。ここに論ぜられていることを要約すれば、すなわち孔子は筆削によつて『春秋』に經世の意を盛ったが、董仲舒はその『春秋』に天人性命の義を加えた。そして司馬遷はこの『春秋』經文を媒介にして説かれた天人性命の義を開闢以來の歴史敘述に敷衍し展開したのであるという。とすれば史意、あるいは歴史敘述の義意とはより基本的には經世の意、敷衍して歴史事象に裏付けられた天人性命の法則ということになろうか。いい換えれば歴史事實を媒介にして經世の意、天人性命の義を説くこと、歴史事象を選別して筆削を加え、經世の觀點に立つて一家言をなすこと、それが歴史敘述に史意を盛ることになるとするもののである⁽¹⁾。

上のように見てくると、地方志の敘述において紀傳體形式を採用した章學誠は、その執筆の精神においても孔子・司馬遷の後繼者であることを主張するものようである。

二 同時代的觀點

別稿でも見たように、彼が乾隆四二年から四四年にかけて編修した『永清縣志』では、當時點の記録をば後任の地方官の縣政に役立てるといふ視點から『志』を敘述していた⁽¹²⁾。彼の敘述の姿勢がこの當代に立脚し經世致用を志向していることは注目すべき視點である。

其れ修志は、觀美を示すにあらず、將に其の實用を求めんとす。時殊り勢異れば、舊志は兼該する能わず。是以て遠きは或は百年、近きも或いは三數十年、須く更修すべし。〔記與東原論修志〕『文史通義』外篇四)

と。地方志は實用を目的とするものであるから、時移り情勢が變われれば、舊志の敘述は情勢の變化に對應できなくなる。だからこそ改修が必要なのだとする。彼の場合、地方志を歴史敘述の範疇に屬せしめていたから、このような姿勢は地方志のみでなく歴史敘述一般にも通ずるものがあつたと理解すべきであらう。『續資治通鑑』の編修の後に、

史家、近きに詳しくして遠きを略すは古より以て然りとす。〔爲畢制軍與錢辛楣宮詹論續鑑書〕『文史通義』外篇三)

というような言葉を書きのこしているし、また、

傳に曰く、禮、時を大と爲す、と。(中略)蓋し時王の制度を貴ぶを言うなり。學者但だ先聖の遺言を誦して時王の制度に達せず。是を以て文、輦帨締繡の玩を爲し、學、鬪奇射覆の資と爲すも、復た其の實用を計らず。故に道隱れて知り難く、士大夫の學問文章も、未だ必ずしも國家の用に備うるに足らざるなり。法顯かなれば守り易し。書吏の存する所の掌故は實に國家の制度の存する所にして、亦た即ち堯・舜以來の因革損益の實迹なり。故に學に志すなければ則ち已む。君子、苟に學に志すあれば、則ち必ず當代の典章を求め、以て人倫日用に切な

らしめ、必ず官司の掌故を求めて經術の精微に通ぜしむれば、則ち學、實事たりて文、空言にあらず、所謂の體あれば必ず用あるなり。當代を知らずして好古を言い、掌故に通ぜずして經術を言へば、則ち鞞腕の文、射覆の學、精能を極むと雖も、其の實用に當るなきこと審かなり。〔史釋〕『文史通義』内篇五)

ともいう。時王の制度を知らずして先聖の遺した言葉を暗誦するのは無意味であり、當代を知らずして好古を言い經術をいうものは、どれほどうわべは精能であつても實用には適さない。かえつて書吏の保存している掌故こそ堯・舜以來、損益をくりかえして傳承されてきた貴重な遺法であり、こちらこそ貴ぶべきものであるとする。いささか強辯の嫌いはあるが、時王の制度のなかにこそ堯・舜以來の遺法が傳えられているのだという。同じ論文の後文には、故に器を含いて道を求め、今を含きて古を求め、人倫日用を含きて學問の精微を求むるは、皆な府史の史の、五史の義に通ずるを知らざる者なり。

といい、同時代的視點を強調している。ちなみに府史の史は「庶人の官において書役を供するもの、いわゆる書吏」であり、五史は内史・外史・太史・小史・御史を指し、卿大夫が就任するものとしており、いずれも「掌故を守り、法を以て先王の道を存する」點で差異はないという。要するに同時代の人倫日用、時王の制度にこそ關心を向けるべきことを強調しているのである。

このような文章や記述を見るかぎり、章學誠は薄古厚今、すなわち古代よりも近代に比重を置き、同時代的觀點から歴史を見る歴史家と理解せざるを得ない⁽³⁾。またそのような視點から歴史を發展的にとらえる合理的な感覺をもつた歴史家として評價されよう。

周官太卜、三易の法を掌り、夏は連山と曰い、殷は歸藏と曰い、周は周易と曰う。各々其の象と數あり、各々其の變と占を殊にし相い襲わず。(中略)本づく所に由りて之を觀れば、特に三王、禮を襲わざるのみならず、三皇五帝も亦た相い沿らざるなり。蓋し聖人首めて世に出御するや、視聽を作新し、神道もて教を設け以て禮樂刑

政の及ばざる所を彌綸し、一に天理の自然に本づくなり。〔易教上〕『文史通義』内篇二

とて、聖王・聖人の時代からしてそれぞれの時代に即した制度を制定していたことを指摘し、制度は王朝ごとに異なるものとしているが、彼は制度の時代的變遷に加えて、世界觀・歴史觀にも古代と近世のその間には決定的な違いが見られるとする。

上古は天道に詳しくして中古以下は人事の大端に詳し。〔易教中〕『文史通義』内篇一

というのによれば、古代では國家の盛衰興亡を上天の意志と解し、歴史事象を天人相關の原理で理解しようとしたが、人智の發達により、「中古、人事の大端に詳し」、すなわち歴史事象をば人事の枠組みで理解するようになったとする。すなわち歴史認識におけるパラダイムの轉換⁽¹⁴⁾を指摘しているのである。歴史認識の上でも上古よりは近代へと文化が發達・發展するとする觀點に立っていたことが知られよう⁽¹⁵⁾。

ただし歴史の大勢としては近代をより高度な文化を享受するものとする展望をもってはいたが、同時に人事は繰り返し、循環すると見る觀點をもっていたことにも留意しなければならないだろう。

夫れ堯・舜は共に聖なるも舉錯異り、文・武は共に聖なるも張弛異る。蓋し天運人事、自ら循環あり。前聖は必ず後聖と異なるにあらず。聖祖、天の仁の如くして康熙末年には積弊あり。憲皇帝にあらざれば至治を擴清する能わず。高宗、天の仁の如くにして而も乾隆末年は略は康熙末年に似たり。〔上韓城相國書〕『章氏遺書』卷一九と。康熙末年の積弊は雍正帝の節儉緊縮政策で解消されたが、乾隆末年にもまた同様な形で積弊が現れたとし、積弊が循環的に訪れるとしている。見方をかえれば、康熙と乾隆の失政をあげることを憚って循環論で説明したとも考えられるが、兩者を總合的に考察すれば、歴史の發展的大勢のなかに循環論が組み込まれていると理解するのが妥當であらう。

三 會通史と正統論

周知のように清代にはいわゆる文字の獄、思想統制のあおりを承けて當代に關する言論が鳴りをひそめ、知識人の關心が古代の研究に向けられたことが考證學的研究を隆盛に導いたとされる。まさに歴史考證學はそのような傾向を代表するものであったといつてよい。しかし上に見たように章學誠は、親しい仲間内に限定してのことではあったが、當時の學風に敢えて逆らつて獨自の主張を展開した。

ところでそのような現代・同時代を無視して古代のことばかり研究したり、人事を無視して性や天のことばかり議論するのを批判する立場は、單に當時の主流派の學問研究の態度の批判に止まるものではなく、章學誠の歴史學の基本的な立場でもあったといふべきであらう。そしてこの當代の視點から人事を中心に歴史事象を論ずる立場は、いい換へれば歴史は同時代史、さらには會通史でなければならないとする主張にもつながるものであったといえよう。

一般に劉知幾が班固の斷代史を尊重したとされるのに對して、章學誠は鄭樵を支持して司馬遷の會通史を尊重することを表明する。彼は鄭樵について、

鄭樵、千載而後に生まれて、慨然として古人の著述の源を見て作者の旨を知るあり。（中略）ここにおいて遂に史遷を匡正し益すに博雅を以てし、班固を貶損してその因襲を譏らんと欲す。而して獨り三千年來の遺文故冊を取り、運すに別識心裁を以てす。蓋し通史家の風を承けて自ら經緯を爲し一家言を成す者なり。（「申鄭」『文史

通義』内篇四）

といい、樵が別識心裁によって古來の文獻より規範とすべきものを選び出し、それらを會通史の形式にまとめ上げ、一家言を成したことを評價するのである。この鄭樵の別識心裁の中に會通史の六便（長所）の認識が含まれていたと

考えられる。章學誠が會通史を尊重するのは主としてこの六便によつてである。

通史の修むるや、其の便に六あり。一に曰く重複を免れ、二に曰く類例を均しくし、三に曰く銓配に便に、四に曰く是非を平かにし、五に曰く牴牾を去り、六に曰く鄰事を詳かにすと。〔釋通〕『文史通義』内篇四

六便とは、すなわち（一）敘述の重複がなくなること、（二）均一の類例が一貫できること、（三）事象の選別と秩序づけが容易になること、（四）價值基準が公正になること、（五）敘述の齟齬や矛盾がなくなること、（六）關連事象が詳述できることなどであるが、これらの中、最も重要なのは、鄭樵も主張するように、（四）の是非が平かになることである（「申鄭」前掲）。それは、すなわち、

夫れ曲直の中は易代に定まる。（中略）惟うに事、數代を隔てて衡鑑至公なり。筆削平允にして折衷定まるに庶幾し。（「釋通」前掲）

という根據からである。利害得失を超えた客觀的評價を歴史事象に下せるのは朝代を重ねた後である。とくに人物の評價については、次王朝の立場からなされたものの中には當を失したものが多く、複數の朝代の後にはじめて客觀的な評價を下すことができる。このような評價の客觀性は會通史においてのみ可能であるというのである。章學誠の理想の歴史敘述が同時代史であると同時に會通史でもある根據は恐らくこの歴史事象の評價と深い關わりがあると考えられる。このように考えるならば、同時代史的觀點から過去の歴史事象を公正かつ客觀的に評價すべしというのが、彼の歴史學の立場であつたと見ることができであろう。

上のような利害得失を超えた、公平で客觀的な立場から歴史事象を評價しようとする態度は、彼の正統論批判にも通ずるものである。過去の王朝の位置づけに關しては、歐陽修の正統論が提出される以前にも、五行相生説で正閏の區別が論じられており、とくに三國の魏と蜀のいずれの政權を正統とするかではしばしば大論争が展開された⁽¹⁶⁾。とくに江南に政權を構えた南朝や南宋時代には、その政治的立場と地理的位置から蜀を正統とし魏を閏位に退ける議論が

優勢であつた。いうまでもなく華北を領有した北朝や金朝への敵對感情からする見解だが、これらの時代には魏を正統とした『三國志』の著者陳壽や魏の紀年を便宜上、採用した『資治通鑑』の撰者司馬光は一般の人々から目の仇にされたことは周知の通りである。この點について章學誠は次のように論ずる。

昔者、陳壽の三國志、魏を紀とし呉・蜀を傳にするや、習鑿齒、漢晉春秋を爲りその統を正す。司馬通鑑、陳氏の説に仍るや、朱子綱目、又た起ちて之を正す。(中略) 而して古今の國志と通鑑を譏る者、殆ど口を肆にして罵詈す。(中略) 陳氏は西晉に生まれ、司馬は北宋に生まる。苟し曹魏の禪讓を讖る者、將た君父を何れの地に置かんとするや。而して習と朱子は則ち固より江東南渡の人なれば、惟うに中原の天統を爭うを恐るるならん。諸賢も地を易えれば、則ち皆な然り。未だ必ずしも今の學究を遜けるを識らんや。是れ則ち古人の世を知らずして、妄りに古人の文辭を論ずべからざるなり。(「文德」『文史通義』内篇二)

と。いま江南政權の特殊な立場を離れて、公正・客觀的に陳壽(『三國志』)や司馬光(『資治通鑑』)の立場を考察すれば、陳壽が活躍した西晉朝は洛陽に都し、司馬光の活躍した北宋朝は開封を都とし、いずれも黃河流域の華北に政權の根據地を置いていた。彼らが漢の禪讓を受けて華北に政權を構えた魏を中心に敘述するのは當然のことである。もし魏政權を認めないとすれば、一體、彼らの君父をどこに置こうというのだろう。陳壽や司馬光を批判した習鑿齒や朱熹は江南政權時代の人であり、中原を回復できない焦躁からこのような議論をしているのであつて、彼らも立場をかえれば皆な同じようなことになるのであるとし、古を論ずるには當時の人の身になって議論するのが「文德」というものであるという。要するに今日いうところの追體驗と感情移入を以て、すなわち歴史家自ら歴史事象に没入して對象を理解するの でなければ、歴史事象の眞正な認識に達することは難しい¹⁷⁾。歴史事象の眞正な認識を得ることなしに、妄りに議論することは慎まなければならないのである。

これらの議論は今日から見れば、いずれも妥當な主張であり、むしろ常識的といつてもよいくらいである。

會通史と正統論に關する議論は執筆の時期からして、いずれも『史籍考』と『續資治通鑑』の編修の副産物らしく⁽¹⁸⁾、廣汎な歴史敘述の研究と編年體史の編修が彼に巨視的鳥瞰的な視點をもたらしたと見ることができるとはできる。

四 歴史認識

章學誠は地方志編修において『志』のほかに『文徵』や『掌故』、あるいは『叢談』などの史料集を編修して『志』と並行させたことは別稿に見た⁽¹⁹⁾通りだが、『志』本體においても闕訪列傳のような列傳の史料集を存置させていた。このように史料の保存に熱心だったのは、資料館・資料室のような史料保存の施設がなかった當時としてはやむを得ざる措置であつたであろうが、章學誠自身にはもつと積極的な意味をもつものであつたらしい。むしろ彼の認識論的根據に基づくものであつたと見るべきであろう。歴史事象そのものの認識、あるいは彼の歴史の概念に由來するものだったからである。彼の歴史事象の認識には觀察者の立場から捉えたものと歴史家の構成にかかるとの二種が區別される。前者に關しては、

夫れ史は記事の書たるも、事、萬變して齊しからず。史文、屈曲して其の事に適如すれば、則ち必ず事に因りて篇に命づけ、常例の拘する所とならず、而る後に能く起訖自如たりて、一言の遺すこと溢るものあるなし。〔書教下〕『文史通義』内篇一

とみえる。歴史事象一般は時々刻々と變化し、間もなく忘却のかたへと消え去り、再び同じかたちで出現し展開することはない。こうした一回的な歴史事象は記録によってのみ保存される。上の記述はこうした事柄に觸れたものであり、いわゆる「存在としての歴史」から所謂「ログスとしての歴史」への過程に言及したものととして理解される。「存在としての歴史」は一回的な歴史事象一般を指すが、歴史家または記録者の手によってその痕跡が記録され、文

字に定着することによって「ロゴスとしての歴史」への路を歩みはじめる²⁰。章學誠のいう「事、萬變して齊しからず、史文、屈曲して其の事に適如す」とは、複雑多様な變化の過程にある歴史事象は、定型的なパターンではとらえられず、的確な把握と自在な言辭によつてのみ記録されると見るのである。また歴史事象は本來、さまざまな事象との錯綜した事實連環のなかにあり、歴史家によつて特定のテーマのもとに排他的に關連事象を一括し因果づけられてはじめて形成される。「事に因りて篇に命づく」とはこのことをいうのであろう。

世の中のすべての事象が變化運動の過程にあるとすれば、それらの事象は痕跡・記録でしか保存できないこととなる。むしろ歴史事象は、殆どの場合、事後的に事象の遺した痕跡を通して研究され、間接的に認識されるのが一般である。されば史料の収集と批判的總合こそが歴史事象をもたらすとさえいえる。そこでは當然のことながら史料をば私心を排して注意深く考察し、公正なかたちのものに構成することが要請される。恐らくそのような認識からであらう。彼は理想の歴史家あるいは歴史敘述について次のような見解を残している。

蓋し良史たらんと欲する者は、當に慎んで天人の際を辨ち、其の天を盡して益すに人を以てせず。其の天を盡して益すに人を以てせざれば、未だ至る能わずと雖も、苟に允く之を知らば、亦た以て著書者の心術に稱うに足る。（『史德』『文史通義』内篇五）

とて、歴史事象の正當な傳達には良識ある心術の媒介も不可欠となるとする。ここである天人の際とは、上古・中古の世の通念であつた天と人との關わり、すなわち天人相關の謂いではなく、無私の天と雜念に凝固まつた人とを區別し、もっぱら天に則つて敘述に臨むべきことを強調しているのである。

彼は良史であるためには文に巧みであることのほかに、良識ある心術を備える必要のあることをも強調した上で、夫れ史の載せる所の者は事なり。事は必ず文を藉りて傳わる。故に良史は文に工みならざるなし。而して文を知らざれば、又た事役を爲すに患しむ。（中略）史の義は天に出で、而して史の文は人力を藉りて以て之を成さざ

る能わず。(「史徳」前掲)

ともいう。ここには「事は必ず文を藉りて傳わる」といい、あるいは「史の文は人力を藉りて以て之を成さざる能わず」とあり、史は文を以て傳わるもの、歴史とは文を借りて傳わった事實(表象)であり、記録された事實こそが歴史である、とする認識が示されている。記録は人の手を通して書かれ残されるとすれば、文に巧みでなければ、あるいは自在な記述・表現がなければ、歴史事象の適切な傳達は不可能であることになろう⁽²¹⁾。

ところで、この、事は史文を藉りて傳わるという認識はかの「道は器(經書)に因つて顯れる」⁽²²⁾という見解と對應するものであり、道の迹が經書に載せられるのと同じ發想によるものである。形而上なる道は、知覺することも認識することもできず、人は僅かに六經なる器の上に開示されたものを通してしか認識できない、とするのが章學誠の所見だが、六經はそもそも先王の政典であり、史の記録である、とする有名な命題「六經皆史」説は歴史事象そのもののなかに道が示され、史の記録には道の迹が盛られているとする認識から出た所見である⁽²³⁾。三代の聖王の事迹が經書なる器に載せられるのと同様、歴史事象も歴史敘述なる器に載せられて保存されるとし⁽²⁴⁾、經書と歴史敘述とを同列に史の記録として位置づけている⁽²⁵⁾。三代の政典も三代以後の歴史敘述も、同様に器であり、そこには道の迹が反映している。三代以後の歴史敘述も時王の事迹を伝えることで、やがては六經に代わる位置づけがなされるという考えからすれば⁽²⁶⁾、歴史事象はできるだけ網羅的に記録して、後人の參照の便宜を整えなければならなくなる。かかる經書と同じ役割を託される歴史敘述は、當然のことながら上に見たような、天を盡して書かれた歴史敘述に限定されよう。

このように記録があつてこそ歴史があり、記録を通してのみ歴史事象が伝えられる、換言すれば、記録がなければ歴史もなく、歴史事象も構築できないと考えるとところから史料保存を強調する彼独自の主張が生まれる。

上のように見てくれば、章學誠が地方志に闕訪列傳を設けたり、『掌故』・『文徵』を加えて三書とするよう提案し

たり^四、さらに『叢談』を加えて四部構成とする²⁸など、史料の保存にこだわったのは、史料の充實こそがより確實な歴史像をもたらすと考えたからであり、上のような歴史認識論上の要請に出るものであったことが理解されるであろう。地方志が將來編纂される國史に史料を提供すべく位置づけられていたとすれば、なおさら史料の充實が要請されたからでもある。

小 結

以上、史意と同時代史的觀點、會通史と正統論、歴史認識の四節五項目について考察してきた。史意は劉知幾『史通』がもつぱら史法を説くのに對して史意の大切さ重要性を指摘したもの、自身の地方志編修の經驗を通して體得した當世への効用、あるいは經世致用を主眼とすべしとする同時代史的觀點、さらには會通史を歴史敘述の好ましい形態とする議論、地方政權的ナシヨナリズムに基づく偏狹な正統論に對する批判、果ては歴史事象をば記録を通して得られた表象とする見解など、章學誠の内面に形成されていた、むしろ近代的な感覺に支えられた歴史認識の一部について論述してきた。

史意については史法に對する概念であることに留意すれば、自ずから内容の方向性は限定される。小論では孔子の春秋筆削の精神に關連づけて狹義の概念規定を試みたが、章學誠の史意にはもっと廣汎な、歴史家の歴史敘述に立ち向かう態度や見識のようなものまでも含めていたように思われる。同時代史的立場や會通史的見通し、反正統論的立場、歴史像の構成における見識ある心術のようなものまでも歴史家に對する要望としてふくめていたのではないだろうか。ここで取り上げた諸項目はその意味で史意の概念内容の一部に相當するものであったように思われる。

章學誠が、編修方針を具申するかたちで關與した地方志は多いが、彼自身、編修に従事した地方志は『天門縣

志』、『和州志』、『永清縣志』、『亳州志』、『湖北通志』の五種類にすぎない。しかも刊行され現存するのは『天門縣志』と『永清縣志』であり、前者は父の要請で編修に参加した習作であり、後者は主編したものながら自ら失敗作の烙印を捺した作品であり、皮肉なことにこの蕪雜な一種だけが我々に遺されているのである。他の三種類はいずれも完成していたにもかかわらず、刊行されなかったり、改竄されて出版されるという有様で、章學誠が歴史家として味わった苦澁はかの劉知幾を凌ぐものがあつたであろう。それだけに一層、蘊蓄を傾けた歴史學・歴史敘述に關する所見を形あるものとして遺したかつたに違いない。

『文史通義』の執筆は中年以後の事業であつたが、章學誠は自身では完成させることができず、約束したいくつかの論文を書き上げられないまま、子息の手によって辛うじて出版されることになつた。この事實から章學誠の事業は、死によつて中斷されたと見るべきであり、ことに『文史通義』の鍵鑰となるべき「春秋教」や「圓神」などの諸篇を缺いていることが彼の歴史學の核心を曖昧なものにしているともいえる⁽²⁹⁾。

彼の事業・著述の目標は歴史敘述・歴史學の革新であり、永年の陋習で色彩を失つていた歴史敘述を再生することであつた。彼は地方志の編修を通して歴史敘述の改革を實踐しようとしたのである⁽³⁰⁾。上に取り上げた諸觀念はそれらの歴史敘述・歴史學の改革に一貫する理念であつたといえる。

注

- (1) 拙稿「章學誠の地方志編修と方志學」(『人文論究』第五三卷第二號、二〇〇三年)。
- (2) 羅炳綿「史籍考修纂的探討(下)」(『新亞學報』第七卷第一期、一九六五年)によると、『史籍考』は紀傳部・編年部・史學部・稗史部・星歷部・譜牒部・地理部・故事部・目錄部・傳記部・小説部からなり、はじめ畢沅の下で百卷、ついで謝啓昆の下では三百卷にまで膨張していったという。
- (3) 「與邵二雲論修宋史書」(『文史通義』外篇三)。

- (4) 陳其泰「錢大昕——歷史考證的精良方法及其影響」(『史學與民族精神』學苑出版社、一九九九年)。
- (5) 黃燕生「清代方志的編修、類型和特點」(『史學史研究』一九九二年第四期)。
- (6) 倉修良「清代方志編修狀況」(『方志學通論(修訂本)』方志出版社、二〇〇三年、第二章第五節一)
- (7) 一般にこの言葉は劉知幾と章學誠の學問の内容を區別する根據として用いられるが、實際には章は劉の史法を吸収し利用しており、あまりにも截然と峻別することは却って章の學問を誤解することになる(拙稿「章學誠史學原理——『六經皆史』管窺——」『關西學院史學』第三二號、二〇〇四年)。
- (8) 拙稿「中唐における新儒學運動の一考察——劉知幾の經書批判と啖・趙・陸氏の春秋學——」(『中國中世史研究』東海大學出版會、一九七一年)、齋木哲郎「啖助・趙匡・陸淳を中心とする唐代春秋學の基礎研究」(『平成八〇年度科學研究補助金研究成果報告書、一九九八年』など参照)。
- (9) 朱敬武「史意文心」『章學誠の歴史文化哲學』文津出版社、一九九六年、第三章第二節四四頁)には史意に關する諸説が列學・紹介されている。
- (10) 林時民「治史宗旨——史法與史意——」(『中國傳統史學的批評主義——劉知幾與章學誠——』學生書局、二〇〇三年)。
- (11) 倉修良・葉建華「史義論」(『章學誠評傳』南京大學出版社、一九九六年、第五章第三節)。
- (12) 拙稿「乾隆永清縣志」編修考」(『章學誠國際學術討論會論文集(仮題)』二〇〇三年報告、未刊)。
- (13) 「舍今而求古」の學とはいわゆる漢學(考證學)の立場であり、彼はこの漢學とは一線を畫する立場を標榜する(陶懋炳「章學誠——我國古代史學的殿軍」『中國古代史學史略』湖南人民出版社、一九八七年)。
- (14) トーマス・クーン、中山茂(譯)『科學革命的構造』(みすず書房、一九七一年)参照。
- (15) 倉修良「進化論的進步史觀」(『章學誠和《文史通義》』中華書局、一九八四年、第四章二、七六頁)および「章學誠的歷史哲學」(『史家史籍史學』山東教育出版社、二〇〇〇年)。
- (16) 陳芳明「宋代正統論的形成背景及其內容——從史學史的觀點試探宋代史學之一——」(『食貨月刊』復刊第一卷第八期)、施丁「論司馬光主編《資治通鑑》」(『歷史研究』一九八六年第四期)。
- (17) 山口久和「章學誠のテクスト論」(『章學誠の知識論——考證學批判を中心として——』創文社、一九九八年、第六章、三五七頁以下)参照。
- (18) 「申鄭」「釋通」の二篇が書かれたのは内藤湖南舊藏鈔本『章氏遺書』目錄(關西大學圖書館所藏)によると「庚辛間草」と

あり、乾隆五五・五六年、すなわち『續資治通鑑』の編修時のことである。

(19) 拙稿「章學誠の地方志編修と方志學」(前掲)。

(20) 歴史のかかる捉え方については、たとえば三木清『歴史の概念』(『歴史哲學』岩波書店、一九三二年、第一章)などを参照。

(21) 「古文公式」(『文史通義』内篇二)には『和州志』編修の際、鳳陽巡撫朱大典の奏報を搜得、全録して乙亥義烈傳を著したことに觸れ、

余謂奏文辭句、并無一定體式、故可點竄古雅、不碍事理。前後自是當時公式、豈可以秦漢之衣冠繪明人之圖像耶。という。

(22) 「原道中」(『文史通義』内篇二)。

(23) この点については次の記述などが参考になろう。

若夫六經皆先王得位行道、經緯世宙之迹、而非託於空言也。(『易教上』『文史通義』内篇二)

六經皆史也。形而上者謂之道、形而下者謂之器。(中略)典章事實、作者之所不敢忽、蓋將即器而明道耳。其書足以明道矣。(『答客問上』『文史通義』内篇四)

六藝皆古史之遺、後人不盡覺其淵源、故覺經異於史耳。(『丙辰笥記』)

(24) 山口久和「六經皆史」をめぐる諸問題」前掲書第三章一〇〇頁。經と史をとともに同質の器とする点については論據を異にするが、理解は氏のものとの共通のようである。

(25) 倉修良「六經皆史說」的闡明」(『章學誠和『文史通義』』前掲、第四章七(3)一一七頁)。

(26) 山口久和「學問的認識における主觀的契機の復権」前掲書第五章二四八頁。

(27) 「方志立三書議」(『文史通義』外篇四)。

(28) 「爲畢制府撰湖北通志序」(『文史通義』外篇六)。

(29) 「春秋教」については、章學誠から編修を託された王宗炎が送付された原稿の中に「春秋教」の含まれていないのを訝っている(「復章實齋書」『晚間居士集』卷五)ことから、平素、彼がこの論文に言及していたことが分かるし(朱敬武「關於『春秋教』的問題」前掲書第六章附録、「圓神」については「書教下」(前掲)で詳細はこれを参照するよう指示していることから、執筆を予定していたことが知られる。

(30)

羅炳良「十八世紀中國歷史編纂學理論的新成就——論章學誠關於史書體裁的辨證思想」，《清史研究》一九九八年第一期、王記録「六經皆史說和史學變革論」，《中國史學思想通史（清代卷）》黃山書社、二〇〇二年。